哦の會
二席目

立春噺大集

竹む

入藏3
1875

旧遠へ門
1875
巻1-4合

序

鷲嶺嘯ノ秋ノ末ノ頃ノ
ナレバ大ヨリ野ニ出テ
見ルヨモギ蓬ノ如ク珍ノ多集シ
高サ三百九拾余寸中年
甲乙ヲ分ツ事又拾番トナスハ
案ニ有ヨリ定ル限リナキ

皇恩をいただき家内もうし
恩うかがふるもまた忘れぬ
嘆くは高年のあつき春より
蕾を出せる梅ひとえだ
清香は咲きの高きまで

常筭亭
君竹樓

巻頭　常筭亭君竹樓

おろかの月　清井

たるの西宮の人京大坂見あしてまりとゆうたれば友達
共乃まれまれまゐりさぶあてはかりさぶあり
ちらふイヤさしてのもかりのさぶ水車とゆうてけり
をんてまさ伺ぶ京都より祇園まて大坂へくるは淀
とゆうりふ而で茶合の流ゲアレ〳〵ゆう車じやりくと
ゆうまりておもそのと答のるゆうのぞけば伺やうたお

花いものぐぐくとあをを吞てハ浮あのんでゐうきとろ加
余りおそ作しさよアレハどらめのてぎ俗と問よ加きハ
おやさやさおそ花ぐけ由くということ

寺二　おてちぐひ　不妙門

月法ゐろ安さ女月さふと選中まそ汐合家ゆくくくく
山をひませぬぐうおくぐ臣あされまん サア下拍もこうぐし
赤門をよ陽て拍ゆくてもこのあ来ゆ一つ多んよ高ており
まんぐ舟よ多鯛の来ぐ臣しぐおぐるぐあと安義よあいまんわと
来ぐ臣ひぐりよおゆくおくれとこうこ家 浪田三郎百紙

の涼しさよ。あの孫若へ立ちの出はんきよ因よざりまんの是へ
くよりまたまがくおくへと仕ゆ是をそ一通りのあらう
おりサテれを繁のれ家ごとへ サアまへあげまんと
やがて後くぼんまを毋ビをおくて出さんれなべ是へくと一ッ
に入ビ出ごがうを是へ親父のようらくさ餘丑風味おとの外
あく一向唱へ百ッ吐きんまもビしたれでまるやびこらよ
ふてかるがらおを是をひんひさそと板さきへ出こちよを板を
喉鳴りよ。イ打ッ是へをけよ仕ゆをそ乗る百姓のあらを
ピッシャリ百姓是へとまれて涼うるとて ふてふ家の湯へ

寺三 尻切 日ふ ちう 小 女 平
ドリヤ一つ出ん分て行うを和家かう大坂へ行ンであろな
ヲ、二里半ばかりアくとらのとまるで今なるへ入相
元ドリヤ〳〵東ふ山やあらうかたんと祇のだ所おりつけ茶ば
小茶味のうるひ山ドやとあり団ざらく風あど吹きて乃
ぶせくあのへまるぐらを是ビよ向ふ灯の見ゆるア峠や
大坂へ近ひとあうく明りの傍ふ来て見きへ所とつきの餐宿
家ありまが遠へて火を一ッかしてやうひまをふきとをさぐ
ただこのむかあ西へ行ゆでもさひっと仕ゆ仕ゆくそこ

くのあんらの毛る間よそだよりの名鼠めさ出ぐみ吸付
るひ出りしよ我敵うの毛とべこち浦くコリヤ毛ち蕎とまり毛を
ぬらーさ

寸巳　我得

浦所をいぬる且那くれ毛ざよ辞さ乞れまて浦ち〜も
ら紙ちやあるうんと巻ま〜て乃毛毛偏都ともトうちふ
てあうされれば恵姫が寸、あのおさい辞ちして姫小まりの
浦ぬりを溢うまてどや

寸六　孤秋

よ指っ花

去りとてハばさうくとよのふ爪ぐ浦るすどやコリヤ去去よ
柳の法利よ浦ぬんうこのて乃ハヤイ去去ひ〜こまりほ
さ　ヨ〜〜大分ぐざりました　上那ちりとりて乃ちう
よふ寸りほさ上那　宴法利を指って来イコリヤ去んどや法ハ
なんぐおとて柳を乃毛ぐた毛ぐちけハ法ぐちけ

寸六　森て吐　嘯　瀬川

敵毛ちの位ありるぐ方擔那の毛ひて毛ぐりひ出ひる日風
と思ふよハけ毛うよ毛ひ毛ちれぐ行よりぐ乳毛ひ出しけうハ嘯
柳も毛ひ毛せ毛ぐ毛ちのハ欲のまひ毛ちのト女方どよ毛りて

入ものでもなんぞをあらそふものとをぐるまと
珊瑚珠のたゞきを遊ぶ[ゆ]ぶんなほて居さりけるのと
とく歌方のまゝ[ゆ]りの下女なりて入をみるれども家のあよ
かをひらくひそめて食りまちん妻を入おさ例の通りとを
りまふ[ゆ]ぎやしう[ゆ]ぎ[ゆ]ばチくとたゞ[ゆ]ぜ[ゆ]ばれ[ゆ]ス[ゆ]ぶ者と
猪部をあけたるとぞくと家ゞまぜて揮[ぎ]よおきて死ぎ

第七　利屋のほど奇　茅江

ナレトー自然居士のうくひよ伝貫秋とゝ[ゆ]ふ者ゞたゞめて永を
はくり歌を云ーたとある人見ゝ[ゆ]ぶ富[ゆ]ん[ゆ]ゝ[ゆ]ふ遊[ゆ]ぶ

おもを洗ひ[illegible]さんと云ゆ今よ烏[illegible]と云る海を[illegible]てそむ[illegible]き
ゆうもおさおとみこがナニ[illegible]ントなよ毎[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]おく海[illegible]永[illegible]
出合[illegible]あるまい[illegible]伽[illegible]て[illegible]ふ[illegible]ん[illegible]ふ[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]
とゆさたまりおぐらみさらゆるゆる毎度川上ゆうぶりを
おがしものさとんの

第八　醤酒者の丸元　夜市

藪医者つるしの[illegible]るさ裏さまゆまり本陣よそでみ[illegible]
さしを頭地[illegible]て伽の若もおく[illegible]よりりした腹の
中よて[illegible]ゆる中の茶箱より巨[illegible]大美の[illegible]を[illegible]き

ちびれば後中大よあり後[illegible]医者をゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
いや大よゆるゆ[illegible]ゆ[illegible]んとせしゆ茶でこをうゆ[illegible]ゆ後の中
ゆ[illegible]れゆり[illegible]ゆ[illegible]ゆうと[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ今一度ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
ゆ[illegible]医者を見るゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

第九　正直ものの　我笑

ある府始末ゆ人三人より世ゆのうゆさゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
ゆうは板アノ常者だんとゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
さゆよ変の因よはなぜ賢ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

見もたをそかものじやてハテ板式三百出せだた道ゑ屋よ
よいのぞぞぞ伝イヤサ常香盤ハ二三百ゐれど大ゑ
ゑ分ク

十軸

祈願　釜井

三十石の京合下りまて例のもうよ京大坂のせり
合大坂ものろのよ伝ゑとゐ京さゑどや標ぶ表ゑ
じやとめうしてもそ屋所ハ大坂どや大坂よたくく大流ぶ
ゑよハなんあるあるゑ京の人堺城ゐしゐ山清ゑの風
景又くぜりどやとまゐ出て大坂ハ又ゐくべゐ

伝ゑの浦や清水の舞台くくゑ見ゐで見ゑや四ゑ
九ゑくゐおろゐあくてんぢくゑもゐんくるとゐゑ京のハぎもん
二軒茶屋ゑとゐハまゐだのうどんや伝をいてもゑ坂
のにゐハゐゐゐんそれでも京をのけさゑや結田全どや京ハ
とどやとまけあゐみいまゐ大坂の連そらどや大坂のゐ城のす
ゐくぐのゑのまゐまゐめゐでも猪どや　もう京ゑんゐとゐや
ゐゐの商ゐくく森入伝どゐく私も八軒屋ゑ着き表もあけと
あゐ　大坂ゑ　さんぜんせり合ゑさゑ京の人をゐくくゐれば私
ゐゐさ私の旦那あり南ゑ三宝と京のぞくゐ能ゑ宝ぐり

おさんれはしてさと搖扇をれだうあぜくだりせんぐさきよりみをてへ、くまんざうれ紙とりのたゝかでもおぞりまをぬ

竹素志作

本朝臺讀千字文

本朝千字文傍註

別点付

平野絵入　西板出来

山書八四益軒貝原先生の著述遠り遠日本天地
宇宙深より今代に到るまでその有事をあのの人の善惡
世の盛衰始り乗に徳ひ其次第を序てよみやすくとの
左旁字を押すとのべども同字をそのまゝ初章まの仮りとし

咄の會
二席目

立春噺大集

竹式

後素軒蘭庭撰

十きを　はぐひのあるあ吾　岩去

めぢさうの葉げる宮ぢでも極ひ六月のすゞやおもしろ
いとそろく酔もさめくちよくあ吾ふとくをたゞけだ
ソリヤあ汲んで来ひとゆふりさや湯のあのこまて
出を板むまるくとこはさひものんでぢでも水い秋田や
のすゞや　中語　イエく　特ヤほうぢんゞめでぢりまん
ム、法華のこゞろほうぢんじゝ今ゝよゝ社ある十ア

十二　一梅

此法華天竺にけばて児乳母おとうぐんしてあるもあり
ともそそぐんせ法しかけ中ようだ年おさまれば
あたしめうを彼のちをれ泣れど人ぐく見をあてアノ
おうだとのめそ金大おだかりれつて来てかうとい乳
母をうさびこのちよさりたあどやといさ

十三　同をどし　柳巴

右八若竹考十きの空有

十四　自惚顔　秋月

近不分合も出来め徒の言葉人ある人と成く嘲しを
きそ又御の出初りおまんを鼻へやーてむりしいきりのお
てに弘法八形くの雲嘯を二後よあんまし来ちく去るよ
四天王を猪用よさんまをたまらくを出て、ソリヤあん
でもあんまのまのあ行たるぐらひじやあんヤア貴
さ自見ようあらひのあ行るうをしびむりしい給でさ

十五　精進の喧嘩　下林

精ををさらひの人あり下女をよんでこ勢のらいさ着
日本ようとせよとしびあ居出て見れ、夕今日ハせうぎん日で

おざりません マチヤ やまぶハ何日じや へを日じや なんぞの イヤ
今日ハ先の佛の日でおざりません なんじや先の そうけの日じや
なんのまあよ精進をするがあるだん なん喰ふぢまま[?]なも
よの中でもおらはしまぞ先のぬしが穢と思ふかねうよ去年
よくろくまでも先の立のかけじやあんなまうなまじ抜をきこおれが
なんぞ入算じやとそ手をうよ男をそにぶさ事もおかけるに
が悪るい喰ふイヤサなんのおまへをはそやしませう係ちへ
ぞふぞ精進をさりませ イヤく 喰ふ イヤ お精進をとを
又婆さんくハ母まおぞ仲仕の布をゆ[?]ておくさるもく

旦那さまもく去や何あ去年りまもん去ねじおくさなまそう
よ先の佛くとあの去年て六今の佛よさりません

十二 南州 ぞき 君竹考 廿二才 大募[?]

コレ母じや人あるさのうよくぶせるそ悲母あまさんあきれあさる
のよ手まうよくよきするとるるとうのくとものく中へきん売
が落とくるるハ誠に医者どのよゆくだぞくおものそうま
ちと母あさんのあれせめて人の飯喰ふうおたすりと母あさがよい
何ぞ苦労が旦じがなのしみじや鉛が喰ふとなりよりしかま
来しこハおざらぬくサ又ハそふあれが内ぞのあるハ母あさがよん

ひとりとなだこが法度なるとかいとうの者あの人の
ようなるこの仏の色が法度なるあるぞのサくりとなるぬ
ぬぐひとりとかくとうなるゆきんの仏の法度なるあてなま
ふものうサ法度なるあるめかれてあるどうひとりあくとうと
るやしゆきが者仏の法度なるなるぎひの子ゆきみのあひ
あれどいと振立てゆきけまらるなるこ極ひるめさそく
ちのたぎやかゆきぢものただこが妬ひとりと法度なるあり
くらぞふざーゆきるといたりやゆて下され仏の法度なる拍と
ゆきみ法色なるせり合ゆきけさぶるさる極ひるゆきこういう

まへかきさまかづらひ何のそれがしに致よなる

十七　仮名の古状　角植

右ハ若竹撰二の巻廿軸の中ニ有

十八　寄伎ひ　瀬川

双六好の人村の外にすく貧九孫にあけて布屋口あぜよ
まかれ路て佳くぐし思ふに此形りでハ門口さも出られぬせ
めて寄(ひく)ものの一すんありともおぼえせぬやと思ひ丸まべき一夜業(しあく)
もあし風ともひ出し此自富の札を買てこいふ名
不ふハ行き日あれバ若常(の)ハすまておぼえせぬやとおぼへども

此丸もごうてハぜふもあらぬとあへ下　路面わざ成念出いよ云ふ
住らふ寒(さい)あり名れバコリヤ寒よふれハ年の子ハ新や太気
あらう富堀いそ出まて来てくれと云ハ寒あそうをを
伝ふけ出玄もだらくして々せ帰り入口の笠路よ蹴(ふまえ)さ庭へ
あらく勝よあべ破双六好と云う　そびりた

十九　多　桐　子　名　尾

ある日妻(つま)能けせしよ留るを守り路る折から来さあ
略ひ来り　いとぐ深夜(やまし)暗の古まり言ふをなよ思う子の我(われ)家(せう)あ
宅へ日ろ毎よ深(やう)もの深夜(や)よ門を叩きよこッたこへうさんたり

出て供あまくへの教授こゝ毎日のまうの前をを付る
よのものそのまるよ対座うもしく淋しく見んへ来客たくへ
通ふの嘗むべーと家と我さろを和はまの情を感じ
入さる恋へ嘉うひそ面よ付来りまろみよ祈てもんくこゝをき
めく恋面の清しくくと思ふ恋を引うへておくさ多とさんつ者さ
へりの盗よ者し活く面を分めはをあ見恋の恋りとと
実も恋れるるうよ多くくとのみ情嘗も祈ゞ恋中く内
よハ居るるへあがゞくへ山の祈ゞ内よ居あ面へ出るるもか
あるあ面げゞ祈り祈出くはとよと役へ役申しを恋ろ恋し

義あの情へをこ〈毋〉くこくろ居ろうあ世世ども出ろくく毋思
あ思してる供をよび用のみ面へ教を斉浦へ行夏ゞ祈り
祈毋る迷者くん色とも中はけ教をはきの恋ろ多を恋ま
て供のみ元色はさ〈むろへて相只へ今へ義だゞけのはみ元ゞ
れりこの心よりあて主くろうな イヤヤ旦那さ多どちくゞ
いな 見れゞおまへうイヤくくと秘して外合よ恋を意
てろけのまの孫びり見者よ丁報弱るさ色ろのできんて
コハ和気やと作医て禍を汚ナイ報ヤりく旦那さ多とへゞ
立ろ こ〈毋〉ろ〈ひよ多さう

寸軸　　秀亭

孔明はうの

某しん若後家の西小川春を帝よりたまりし毎年お呉服屋の
反代多のうへ女夫孔明をつかうまんといふて孔明を
あうでおざりまんと云う明をたのうあ小川八郎作さ
小百姓のやの男ら来りて何も申明人おざりまんとい
孔明をたのう三人の婦一の家中おくの四ら七十余の
かさ夜がはそひ明をあしてアく去いさ云られ今ゆきさ
三ッどの人を見さ

蘭癖二の終

咄の會
二席目

立春噺大集

立春噺大集巻二

後素軒蘭庭撰

兎の上噺

巾武

ある所てまつ鳥芹と出合むる見ハ久しく先度ハ
宿で菓子袱の中て出よりの不さ俳じや今日ハどこへ
ゆくハ何も用もなく気だらしよ出うけて丑さが見ハどこへ
いても寒角人の浅ゆ子るふて兎の浅利をとる者さ見ハ
ゆうゆうの者の上じやとゆハ見ハ兎もあてい湖あるぞハ
ゆハいのでも法ハ延紙の世話よりまん

廿三

穩婆　貴投

それあげ婆を渡世とするものゝ中山の親類（高橋）
てれんとりたげ婆あを寄うだんしてまんぢ近年お医高
麦ぐわんと出来はて一通りでハ中〳〵はまぢぐ出来ぬ
ぢゝで親類ゝ及の出産を豊敷りはて中山親類初信ゝ
たげ婆とゞ着板ぐ出〳〵ゝ寄ぐまんと言乳て七日七
夜五夜ゞ世ちゞ伝ぐる晩沖戸をギイとひらゝ出なん
婆ゝとりたゝさゆゝうゝて持ちづ乳ひゝとも知板せりゝ
ぐゝ小店へいもりゝとの治ふ

廿三

懐引猿　十ヒ七八

去大家へ懐ゝ来り嫁ゝの産暴ハゝりとせんとりゝふ
所へ奥ゝ及内ゝのゝまんの合ゝりのぞ者ゝゝ板もゝ〳〵ん
さゝはでハゝとゝられゝを懐ゝ足とれてきゝりもさる
行ひりさゝりレイ

廿四

去ん坊　小子

悟空ゝ二形ゝ多ゝ日去ゝるゝ一ん坊の悟坊踊ゝ動ゝ行
しゝゞ時まゞさゝて体の外去悪しをゝさせゝゝ日も言ゝ及び
ゝれべゝ部奥ゝ帰ゝ名羽ゝ日又踊ゝ行てゝのゝハ〳〵ゝ悪を

いとゝ法師よりまさる臣さとりて行やうこそ至て冷〻臣が法すてをの
ゝるへアノ志ろんをうぐ行のも拾ひて来る事うふまさまとりて拾
来りしものを又をびちふさい紙綴ようとゝのをびを一さ極つよ
切り入あり久れば見へいつまるものとかのふろの手付きうんぬど
志びりのくとり

廿五　毒ぐくとり　名付考 但千日書に有　茶　橘

ある医者のむすめを云ひ娶りし男のうト亦出来しか
へサア大事の屋敷をうばとゝ母とうたぐよへ亜ほど
とひそくとものをとゝの〈さゝらび今者ぐ見へちうさんあと

世ゝのうゝ法師よりまさりく我宗旨を見へ臣ゝ公せくまゝ 淡路編
燭をゝ蔵ヒわふ一閑ゝの夜のくゝさへ臣ゝさぐうく 潮
くゝ氏弥の社ゝ本さう神本の松ぢやまう何ぢやまう
後ゝまゝぐれのめさひやう汀井ほけて消しが枝十日
志てもいつもも臣ゝうゝふゝてもゝ志なくいまく見へ形へ
和ゝゝ十日計りして云関へたのゝまゝせう娘へいなくぐふ
主ゝいゝて云おゝれへ藤渋ぐ茶代拾て来さ

廿六　冥　悔うへさ　夏　涼

大佛の冥悔の止ぐおゝ志ゝ事ぐとゝろくゝとゝ臣内

文八臣がやそうなれ流宣ぶあのさハテめんそふおそふけでん
神さ多のゆうあイヤ大佛さるがおりまゆうきるゆ分れだ
宝帳札を巴〜さぶあさ公ろよ〜月ゆ文八伝丑でぶぶりまん
ぞうぞ宝帳さ巴て下さりませイヤよく号ゆて月ゆおとあげ丸

オヤセ

瓢箪の絵〜彩

春紅

瓢箪の絵の大王八月十六日の夜月を見ゆ出〜ゆ名ゆ海
中大ゆまだせるゆ〜ゆ絵ゆ〜ゆれだ大王大ゆおとゆさ
ゆ下ゆいたけてゆを見させゆれべ現物を持ゆる所なん所
をゆて居さ

廿八　臺所の奥　李備

西宮えびす宮家の酒造の旦那いまゞ新町の味を知うぞ出入の料理を連吉四郎方よりて来社をはじめて大さゝぎの宮中　度会（風呂）あるべし亭こゝろくぶ よぶんぐりをうけしようと旦那大さゝ接頭そんぐ山ゝ度会ぐ ふくをとてかるゝ家ゝ来て旅宿ゆゝれ々る時ゝ家ゝ いく波一都所奥一と作ゝ生々る中と同ゝ昆布ぐ ゝ汁の完ぐこゝあり

廿九　法　ゝゝゝあゝ

初刊　文政丙申　正堂

昆布屋の手代ぐ代ゝせんぐる人ゝ生うゝ生と祝方のゝまあいろく と智略をめぐ下し毎度ゝ出々るぐ度々ゝ出れば自出る 首尾もきゝのきりせんゝなく碁会にて居る西ゝ降ゝ先 ゝうゝ泊ゝ中来ゝ人ゝ昆布さ々あゝ先達 ゝり私波一かけ西ゝ（だゝとぢん）まゝ生ゝゝまゝ南 四ゝり彼方ぐゝそぐかんぐ人ゝ仕て昆布の 入西一丁四九を小さゝ（ゆゝ）ゝゝゝ西ゝ人ゝの西ゝゝゝ 家ゝゝゝ戻ゝゝおゝゝトこゝいゝたゝゝ家ゝゝゝ ゝゝゝ起ゝゝゝゝゝゝゝゝ

よカノ如ク皆の方(形)きさるかぐもる図者も又酔も四ぬで
过すて加るで房トしくく戸きたけば浴室ゆえ弦と
でもしら毛を起ふくとを起さるまどら様入だ家なまで起で
見雅おく浴室をあけよ歩れなまで酒くさひ長
うそををそうく、ソリリやさりまいとどや

三十軸　結撮寺法遍　鳥二助

釈迦法佛の祥月の退夜あれどとて極楽せんのれぐ
さりく多紙をのて昇漢中より中金てる色よりど
おく彼佛ほさり遊去せんりは法とて来除あり生ぐ

法をうと九尺の堂浦を去ゆらくおのく蓮華の座席
をのふけの色べ七宝をちりだあろ蓮華の具のうつハ二百
味の飲食を堆く彼(くりのくだんの富品ゆまかり出て
叔おのくいづまもさをを中入そまのの水を呑ーまん光と
ゆも釈迦如来あうびよ流生の人乃逆名くさ多や祇おを
うやまりくよりのて法井ま極乗ぐんゆいてーまんホニノ
光ゲまおとよ教悉謝法でおざりまんてや光れあんさり
の通りと猫ようひ合歩ー　ちやかひよせそん右発ちを乃
人乃世界と表りしてこうかくちろくこたけ色ざいごくと

ゆくゑ〳〵てきにあを禁海あれど天のゐんぐゑ茶を
金をひさげゑのぶて持出沙羅林ゑせとしさびしのとゑ
えのサア おきゐも なけあるゑ及び冷〳〵 曲の出るとあで
ちさ法そこうめさくとゆるぐゆ〳〵ちゐや家あるゐ地ん
いとおど殘けべ羅漢〳〵ら都して出のくさのゝおさんぐ
なをひそをにだうり連根とるのゝや

榮茶三の終

唯の志
二席目

三春日噺大作集

常爭亭ノ君竹擾

田舎氣質　政義

百性共長家屋松ヶ浦方へ参り出家よばざりまんろ
共長家でおぐらりまん私粹共松めを元抜させはしてろ仮ぞた
よい名を付てこざりませと私めべ長屋ろうちぞさ多るほど
たくはしい名を付て呉りほしとまぞろくに呉ーてそ　いよへ
名ろみ元を仙のとぞおぐりまを的法名のこ部とがよおろ長屋
びつくりしまへろ仮さ多のてるむしのほへものぞふをはけ

らきまんまんこへ　えやまんまこが世界をうめてゆきさ
うらが蒸おおてやへ云ひめまう勉強ふはして居ちゃまデ　モ
あんまりおなぐるりまんぐいハテ　サテ　うらがおりこさ坂の
揚屋で接ん客さ対象客さい合客の人をうらも笑そうるへさ

三十二　道化者の悟道　布生

紙入を落しうろくそを拾ひ人ありあるわるえ
道化者一人来り見せびらかすこ人ありノヤハ云ひどのあるを
うろくそ拾さひ中　イヤ落しはさ何を拾こ入を
ハテサテノ見へまはせあうりて居ひまんハテまを

俗道をさ去れ地獄で俗の口かーこ人が地獄極楽と
いうあるがあるさが迷ってそ中ゝ居るさ考ひ云道のけで
おざるてやソレへ何て拾ふ居ると問へバハテ見せまさ
を紙へが落てこ見へ今ゝ入世でこおざかこを落せとうる
もの中やそれでさうやと云ひ夢へ海むこをユレ因果とい
まをるとうへべ　八蔵　こおざうこ今落はて紙入の中こ浸
ぐへをておざうはこ　道化者　こ云ひさうの日合ざかこ

三十三　聾の口真　之行

七十余のはんぺおやじ髪後の床屋さ髪ぐ刈ぐ刈ぐて

あつまてゆく春をおそひくれぬかとうとうおくりおくりてサアロをあられといふ鶯あとをしたひ
く云られどうとくぶれべコレ彩ウさんちやいとはをぬて
仕形まそるんせまだ野のおやだわりてあくびおれでるへ人
じやあれようのさあり
三十四　いうりの　鷹　　左又

桜美の枝を傳ひうりそさみてそれを見て旦那大きう後
を立久三を呼アレ急ぎたれかこまりまのてはとしごを
出ぬ屋根あぐりあをべ傳ひ十七八だのりあるを法ひ

き娘ぐ刻ださみまそ野の梅の枝をおれ体あれべ入こだの枝ぐ
ほしく
三十五　浪　毒　　毒友

田舎道若四五人連まそるを法の社へ参り帰る而下よこ法生さよ
まへぐれぐ者ぐ男ぐ的とあるほてやくをやく見入法と
ヤ市立でおぐりまんを家でぐんをうあへえる法とて安むし
仁徳天皇とうへうろぐるきやまのりて見さへ穂ぐん氏の
おまどく振りひよりりそうと振りまそ而でそうんのそんで
まそよくまあうまんせ　ハイく　イヤヤ　そは法へ振りのようらでへ

おごりまさあり　そうぞんあるなるべし吸でゆきふものでやぶんせあ

三十六　おく　じ法　路島　舟

あちの旦那まぶまぶやゆ方つとゝ法あのてきりいそゝじ法好
じやてやゝ九ゝまきの不のゆ亨ゆどゝり寺まの好ゝまゝ自
のゆうまをちと鶴さ一ゆまゝ鶴ゆゆゆまゝ蔦天丼はじぶゝ法
門の接ぶ虹じまぶぶて板行のまん中戸が縄のまんらゝりと
ゆちまゝのゆとゝる濃のゆちとゝ猪酒さうまゝ不ゆりゆゆぶぎ
よりゆまゝりめてやフウンほんまきのいゝりぶまぶぎぶ村ん
ゆう三度くのあしゝナうまな麺ゆんじや

三十七

馬の述懐　銀朝

我人袖をきかさねてひまよりおりろふあり借屋をおばちる
屋を建てる事を六七疋が両はゑく家なきほどに才まで紙代
をそるまのり込む今は穀もゐかつ力もなく峰ばかせんとして形も世が
低く添ぬ毎かゑあり一家中へ出て主様まで殷かんと栗毛の
るるま幼かと窮って鞍をすへ行くもちだちの小蔵が借まのやうねど
一きんまかけ世にまぞふかきつらんけるならいぬ紀して主人を乗せ
しまるへ人起上りおまたが馬の上をきまり敷まあのまをとげとくと

三十八

笑ひ顔　里麦

正月二日高臺えじめ店びらき通ひはむりと繁盛中に
なぞこのんで居る西へ返ろの子が仰なさん此所で出ておくれなと
いそうやへ礼まめと云へば主人大きな根子じや是では法師通
さぬがよろうまだまやろと云へばイヽヱさ母さまが言ひ捨てゝそ
も茶漬の味とやさしやきぬ

三十九

梅よ鶯　相亜

家よ流利の盤女ひきぞめの合をそるとて歳暮も込メ
人も看かう集り低くと名人の物指へサア今ごとを夜の
みな云えと法師の連引いさゝめ見え多き心耳をさるし

きづまりの山をたづつゝ渡るも命しぬるよりあるるみちの
川と流てる宮中へ祈さるものをひさぐめと出でめてきん
でゝ〜と東西も分ぐ〜ぞうくとうえ浦（ゑ）うらの法花の
きんてをとこえびがフト宮の声うづをやめのじゝ方遠て
ハ〜〜えの分さむへ山しーや方

二十軸　鞆の浦切　家楷

遠方九州ゝこの人宮本きう人石連中の福をよかーやをを
借り遠前の内人舞ひとして鋼と鞆内ゝ色石ゝ方汲来り
見ハ見ゝ分る者と見ゝ（わ）れいかの方来たものをさ宮よて

此ふるく去ものハ行とうの人ものと同ゝ見ハたもとてかなはこ
おぞゝ波〜ゝよゝ者といてかゝり名海ゝべ中仮の素よ
せよとも分ゝ方ゝ板中仮よ方ゝ八昭先行のことと
やゝをかなばこゝ波せゝと同ゝ色ゝれハイヤ公ゝよてゝ色を
樓はてゝ色ゝ渦ばこゝ波〜はてゝ

竹生島絵

此西ゝ書ゝ〜也板義仕ん

投佐義早ト筮

きそ　牧摺
義本　添

此書ハ一二三四の切形の入〜義本ゝ本を右白
思ゝゝゝち添て投義ゝて人の死の上右幽福福を
速ゝ愛ゝる下方ゝの若要を初ゝむる方右の書ゝり

年忘噺角力

全部五冊　彩色入
新板よみ本

安永末の冬新潟の親戚なる納の大家しを下高田撰して話を左清噺と云の中を正月二日より出す西市山

徳軒素従撰　ひらがな絵入
全部五冊　新板よみ本

噺会三席目秋の夜会敷多法恵板の名作本席上山

の噺大集と三席目話大全との異或は六月七月比の暑を志のぐ

五日から本出市山求め出版てそ山

全部十冊　ひらがな画入
新板よみ本

4年1月

年忘嘯角力　全部五冊　彩画入
安永末の頃新清水親方なる人納の大方しを　彩板よみ本
長本野山撰本下南表撰よて話を元清嘯亭の
初席の本當中元正月二日より出る西下山

夕涼新話集（ゆうすずみしんわしゅう）　角田椿軒素従撰　彩画入
全部五冊　彩板よみ本

右八嘯亭三席目の嘯大集と三席目話大全との
名異堂蒲の接真或八六月七月比の暑を考のぐ
新話集七月十五日名本出中山求め出版てる山

新撰話大全（しんせんわだいぜん）　全部十冊　彩画入
嘯亭三席目秋の夜あり死比者様彩山蓮向の座
立作会数名法恵板こ名本本席上山　彩板よみ本